

これはノンフィクション作品だ。いや、ほぼノンフィクションといったところかな。ここに書かれている登場人物や企業や団体はすべて実在するし、ここに描かれている出来事もすべて本当にあつたことばかりだけれど、厳密とは言い切れない箇所（たとえば、交わされた会話の一言一句とか、正確な日付とか、描写されている空の色とか）も含まれている。

ふたりの5年間にわたるやり取りをストーリー形式でまとめたこの『あるミニマリストの物語』は、僕（ジョシユア・フィールド・ミルバーン）が一人称で話を進めながら、ライアン・ニコデマスによるコメントや解説や苛立つほど聡明な妨害が入るといふ形をとっている。この構成は、ある意味、僕

らふたりの関係をとてもよく表わしたものだ（マジで普段からお互いに横やりを入れ合つてばかりだし）。本書では、ライアンの横やりはすべて注釈形式で巻末に記されている。^{*1}この注釈は、その都度読んでもらつてもいいし、本文をひと通り読み終えてからまとめて読んでもらつてもいい。人生と同じで、どうするかを決めるのはあなただ。

いくつかの名称（人名や企業名）については、その筋からのお叱りを受けることを避けるため変更したものもある。^{*2}また、文脈や全体の流れを重視して、少し現実に手を加えた箇所もあるにはあるけれど、それらはどれも、1000ページに及ぶ原稿がこのようにスリム化されていく過程でドンドンと薄れていった（それが必然だった）。また、出来事や人々について、ライアンと僕が揃つて記憶違いしていることもきつとあるだろうし、ふたりの記憶が食い違っている部分もある。ただ、そういった思い違いは、変に聞こえるかもしれないけれど、それはそれで「真実」なのだ。真実なんて結局のところ主観的なものでしかないと思ふ。そうだよな？

この本の位置づけについて、僕らはさんざん考えた挙句、「メモワール（回想）」と呼ぶことにした。もちろん32歳の若造が回想録を書くなんて生意気だつてことはわかっている。でも実際には、これは回想録というよりは、むしろこれまでの人生で学んだことを物語形式で語ろうという試みだ。ストーリーテリング形式や会話形式^{*3}で肉付けすることで、ライアンと僕がウェブサイト「TheMinimalists.

「自伝」で触れている数多くのトピックを、より深く理解できるのではないかとこの発想だ。「自伝」と呼んでしまったら、何だか堅苦しくて自意識過剰だし、だいたい自伝を書く人っていうのは、大統領とか、実業家とか、クスリの問題を乗り越えた元人気子役とかの有名人に限られている。あなたがこの本を回想録と呼ぶことに抵抗があったら、好きなように別の呼びかたをしてほしい。「主観的ノンフィクション小説」でもいいし、「個人史」でもいいし、「もつと有意義な生き方をするためのレシピ本」でもいい、どんな呼び方をされたとしても、僕はまったく気にしないよ。

ジョシユア・フィールズ・ミルバーン

パート 1

すべてのものの
EVERYTHING

アイデンティティは己の着ている服で決まる。僕はこの狭苦しい会議室に座り、ワイシャツとタックの入ったパンツに身を包んだゴーストたちに囲まれている。人数は、35人、いや、40人いるかもしれない。そのほとんどが中間管理職だ。ほぼ全員が白人で、ほぼ全員が男性で、ほぼ全員が冷たいオーラをにじみ出している。このグループの典型的な気質は、広場恐怖症患者のそれとよく似通っている。

マイクロソフトExcelのスプレッドシートが、前方の天井から吊るされた大きすぎるキャンバススクリーンに映し出される。そのキャンバスはペラペラで、傷だらけだ。少し黄ばんでいるのは、社屋での喫煙が許されていた時代の名残だろう。それ以外は、この部屋にある何もかもが、とにかくことごとく白い——壁も、天井も、人間も、まるでそのすべてが同じ素材から切り抜かれて作られたかのように白い。いや、ひとりだけ例外がある。後方に座っているスタンだ。ここシンシナティは黒人が人口の45%を占めているはずなのに、わが社には一桁の割合しか黒人がいない。そのひとりがスタンだ。彼が重役から意見を求められることはほとんどなく、意見を述べたとしても、苦笑や頷きひとつで退けられてしまう。図体こそNFLのラインバックカーに引けを取らないスタンだが、彼は優しさの塊のような男だ。それでも僕は秘かに夢見ずにいられない。いつの日か、彼が重役たちの見下したような笑顔に我慢がなくなくなり、魚のように冷たい目をした上司の顔が別人のようになるまでメチャクチャにぶちめす日がやってくることを。

僕らの背後の壁にあるブロードスパン社の巨大なロゴは、誰の目にも否応なしに入ってくる。線画の強欲そうなワシが、その翼を大きく広げ、両爪で会社名のイニシャルを並べて掴んでいる。そのロゴの下には「今、この時」という神秘的なスローガンがヘルベチカ・ボールド体フォントで書かれている。「今、この時」という言葉を何度も繰り返し返してみると、あの細いネクタイを締めたマーケティングの連中がまるで意図していなかったような、ある種、形而上学的な趣のある深遠な自明の理に聞こえてくるから不思議だ。

僕たちが今いるこの部屋は、陸の孤島のように、11階フロアのだ真ん中に位置している。今年最後の月曜販売会議だ。どちらもアイルランド系の名字を持ち、どちらがどちらかほとんど区別がつかない僕の上司とその上司の上司に挟まれて、実にありがたい席に僕は座っている。ここからは自然光を一切拝むことができない。業務用の強力清掃洗剤の匂いと、ここにいる人々の悪意が相まって、この部屋には悪臭がたちこめている。フォルマイカ社製の大きな会議用テーブルに据えられた椅子はすべて埋まっている。後から来て椅子にあぶれた一握りの人たちは、教会で懺悔の順番を待つかのように、会議室の後方あたりにまとまって立っている。テーブルの上には、プリントアウトされたスプレッドシートや飲みかけのスターバックスの紙コップが散乱している。僕の後ろにいる誰かが欠伸をすると、それが引き金となって、他の数人も欠伸をはじめ。退屈は伝染するものだ。

キャンバススクリーンに映し出されているスプレッドシートは、ピントが合っていないので、このぼやけた画面から何か意味深いものを見いだそうと、僕ら全員が目細めて前方をにらみつける。プロジェクターはホワイトノイズの単調な低音を鳴らし続けているが、全員が聞こえないふりをしている。でも僕には聞こえないふりなんてできない。できるもんか。この絶え間のない不愉快な振動音は、その他のあらゆる音を抑えつけて、この空気をすっかり支配しているのだから。

天井の照明は、ところどころ消されている。ここにいる全員が、半分だけ灯された忌まわしい蛍光灯の明かりの洗礼を受けて、なんとなく病んでいるように見える。テーブルの向こうの別の誰かが欠伸をする。そしてまた他の誰か。ぼつちやりした赤い頬の男は、クシヤミを2回してから、シヤツの袖口で鼻をぬぐう。

唯一ネクタイを締めていない男、僕の20年来の親友のライアン・ニコデマスが、でっかいコーヒークップを片手に会議室に入ってくる。突き出た顎には、申し訳なさそうな笑顔と2日ほど剃っていない無精ひげが浮かんでいる。日焼けで浅黒く、自信に溢れた態度で、大遅刻してやってきた*。

僕の上司（それとも上司の上司のほうかも）が質問を投げかける。最後に名前を呼びかけられるまで、それが僕に向けられた質問だとは気付かない。「……今週の設置率が減少したのはどういうわけだろう、ミリー？」。うちの社員の半数が僕のことをミリーと呼ぶ。親愛の情が込められていることあれば、偉ぶった態度でそう呼ばれることもあり、その割合は半々、相手とイントネーション次第だ。僕は右を見てから左を見る。どちらの上司も前方で光を放つスプレッドシートのグリッドを見つめている。どちらの上司も血管拡張の初期症状で赤味を帯びた顔をしているので、絶え間なく怒り続けているのか、それとも恥ずかしがっているのか、もしくは、どうすればそんなことができるのかはともかく、怒りと恥ずかしさを同時に抱いているように見える。退屈なピンボケのスプレッドシートは、グリーンと赤で色分けされていて、3日後にやってくるクリスマス・シーズンにピツタリだ。と

言っても、これは単なる偶然で、この色分けは一年中、どの会議でもまったく変わらない。グリーンは良い事、赤は悪い事を意味している。今日のピンボケのスクリーンは赤が占拠している。

僕は数字に目をやり、とても難しい表情を浮かべているように見えていることを願いながら、顔をしかめ、標準装備している数ある簡潔な返答のひとつを選んで口にする。いかにも僕が今のシチュエーションをしっかりと把握しているように聞こえるよう、「マーケティング支出」とか、「GRP」や「TPR」などの頭文字用語を盛り込んで話す。部屋の半数が、僕の金言的ない訳のリズムに共振するように頷いている。どうやら上司たちは満足しているようだ。僕は一応のポーズとして、黄色いリーガルパッド・ノートにペンでメモを書きする。「実行可能」とかなんとか適当に。席がないまま部屋の横端まで移動していたライアンだけは、僕が並び立てるたわごとを聞きながら首を横に振っている。プロジェクターの唸る音は、秒を追うごとに大きくなっていくような気がする。ブンブンブン^{*}。上司たちは質問の標的を次の人物に移す。

僕は27歳のとき管理職に昇進して、140年続くこの会社の史上最年少記録を作った。それってすごいことだと僕はしばらく本気で思っていた。だって、誰もが世間でしょっちゅう口にする、あの有害な例の質問、「ところであなたは何をされているのですか？」を問われたとき、尊敬のまなざしを向けてもらえる肩書がついたのだから。僕はプライドのこもった空気感を出しつつ「150店舗ある

販売店の運営を管理しているんだ」なんて答えることができる。

カッコいい？ うーん、実はそうでもなかったりする。こうなったのはひとつの大きな偶然のようなものだ。僕のこれまでの人生は、あらゆる意味で、偶然の積み重ねだから、自分が「今、この時」までどうやってたどり着いたのか、それを正確に分析して語るのはとても難しい。

この偶然は、そもそも、1981年7月29日午後2時39分、オハイオ州の斜陽産業集中地域の中にある自動車工場労働者の街デイトンではじまった。ジェネレーションXとも、個人主義で有名なミー・ジェネレーションとも呼ばれる世代のギリギリの末尾でこの世に僕が生まれたとき、42歳の父は躁鬱病で、36歳の母はアル中だった。絵に描いたような機能不全家族ってやつだ^{*}。

肩幅が広く、若白髪が目立っていた父のローウエルは、精神分裂症患者で、本当には存在しない人々を根気よく頭の中で作り上げては、そいつらが自分の人生を台無しにしようと企てていると信じていた。父はひとときわ背が高く、元フットボール選手と言っても通用するほどの巨漢で、母のクロエの3倍はあった。一方の母は、父の外見につり合わないほど可愛らしかった。ふたりとも自らの血肉を自分で痛めつけながら、苦痛の中を転げまわるようにして生きていた。

グリーン街の家のリビングルームで家族3人が揃っている僕の最初の記憶は、ソファから見た光景だ。それは、母の鎖骨の下のはだけた胸部でタバコの火をもみ消している父の緊張過度で無表情な顔だ。(あれから四半世紀が経った今でも、僕は時々悪夢にうなされ、真夜中に悲鳴を上げながら手足を激しく動かしては、妻に文句を言われている)。最終的に、母は僕を連れて父のもとを去った。母が以前にもまして酒を飲むようになったのは、ちょうどその頃のことだ。当時、僕は3歳だった。

僕はその後、7歳のときのクリスマスに一度だけ父と会っている。その1年後、父の死亡証明書が届いた。死因は心不全で、末期のアルコール性心筋症によるものと書いてあった。父の葬儀の光景で唯一覚えてるのは、暗い雨空の下での埋葬式で、壊れてしまった傘に悪戦苦闘する母の姿だ。柄をまとめるスプリングが落ちてしまい、今にもバラバラになりそうな傘を母は必死に支えていた。車で6時間もかかるシカゴまでの道のりも、その帰りの道のりも、僕はまったく覚えていないけれど、あの墓地での容赦ない猛烈な土砂降りだけは何故だか強く印象に残ったままだ。

思春期前の僕は、紙幣というものは、緑色のお札と白い券の2種類があると本気で思いこんでいた。母はよく、白い券をどこかで2対1の安レート(1ドル分を50セント)で緑色のお札に換金していた。この白い食品交換券はアルコールとの交換が認められていなかったからだ。月初めに決まって送られてくる白い券には、政府発行の栄養パンフレットも同封されていたらしいが、当時の僕はそんなこと

ちつとも知らなかった。

母はフルタイムの仕事に就くたびに、法律で定められた最低賃金ギリギリの収入を得ていたけれど、仕事がちちんと続いたためしはなかった。いったんアルコールを飲みはじめると止まらなくなるのだ。そうなる僕らの暮らすふた間のアパートに何日も引きこもって、ろくに食べることもせず、とにかく大酒を飲み、セーラム・ライトをあの緑色のソフトパツクから取り出しては立て続けに吸い、つまづき、転びながら、灰まみれのソファにおさまる。

母のお気に入りアルコールは赤ワインだったが、僕らのアパートから7ブロック先にある酒屋の棚の下に並んでいるワインをやるだけのお金がないときには、ミルウォーキー・ベスト(またはその週のセールで一番安いビール)のロング缶に落ちて着いていた。この酒屋の店主は、母にツケでビールを買わせてくれることもあった。

酒屋までの長い道のりを歩く母は、いつも騒がしい陽気さと期待に満ち溢れている様子で、その陽気さが濃霧となって恥辱の念を覆っていた。でも、店から家に帰る道のりの母は、いつも神経質で落ち着かなかった。それはちょうどスーパーマーケットで新しいオモチャを買いたえられた子供が、帰路の半分も過ぎていない車中で我慢できなくなり、複雑なパッケージを剥ぎ取って遊びはじめると似ている。母は家にとどまり着くまで待つことができず、(誰にともなく「ビール1本だけ」と言い

訳をしながら)、茶色の紙袋から缶を取り出す。そんなだから、母にとつては、酒屋からの帰路の中でも、特に最後の3ブロックを進むのはとても難しく、時には、途中にあるベンチで一休みしなければならぬこともあった。小休止するために座ったはずなのに、ほぼ毎回の確率で、「もう1本飲めば少し楽になるから」と次のビールの栓を抜く。そして結局は、茶色の紙袋を股にはさみ、自宅からわずかに数ブロックの路上のベンチで眠る体重40キログラムの女性を通行人が発見することになる。そういうことが数えきれないほどあった。

かすかな尿とビールとタバコの匂い（僕は今でもあの部屋の匂いをしつかり覚えている）がたちこめる湿気の多いアパートの自宅に母が何とかして帰って来られたときでも、キッチンまで空き缶を捨てに行くことすらできないほど酔っていたので、座っているソファの下に空き缶を置き、前フラップで隠すというのが彼女の「常套手段」だった。時にはひとりでトイレにたどり着くこともできなかった。そうやってソファのクッションが汚れるたびに、ひっくり返して使っていた。暗いアパートの照明をつけると、きまつて何匹ものゴキブリが散り隠れていた。ゴキブリはどうやらアパートの隣人宅からやってきているらしかった。その隣人は、70代半ばになる親切で孤独な男性だった。第二次大戦の退役軍人で、部屋には本当なら3つか4つは余計に部屋が必要なほどの私物に溢れ、虫が出ても一向に気にしていないようだった。おそらくそれば、もつとひどく過酷な状況を経験したからなのか、

それとも、孤独よりは虫と一緒にいるほうがずっとましだと思っていたからかもしれない。

母はスリッパでゴキブリを叩き殺すたびに、マタイ伝22章の「汝の隣人を愛せよ」をつぶやいていた。ただし、酔っているときはこの文句が「汝の隣人よクソくらえ」に変わっていたので、僕は小さい頃ずつと、このふたつはまったく別の文句で、旧約聖書と新約聖書の違いのひとつに違いはないと思っ込んでいた。

母は熱心なカトリック教徒だった。毎日、いや、日に何度も、右手の親指とニコチンまみれの人差し指にタコができるまでロザリオの数珠を転がしながら祈りを捧げ、「我らが主よ」「マリア様よ」と何度もつぶやき、また、アルコール中毒者更生会が推奨する心に平静をもたらすニーバーの祈りも繰り返して、彼女から酒を取り去りたまえ、彼女の病気を、この「気の病」を治したまえと神に乞い願っていた。でも、どれだけ祈りを捧げたところで、母の心に平静などやってこなかった。思春期直前の僕の目から見れば、神は他人の不幸を喜んでるか、もしくは無能か、またはその両方にしか思えなかった。神が存在すると仮定しての話だけだ。

あのウォーレン街の自宅の電気供給が止められた回数指折り数えるためには、両靴下を脱がなければならぬ^{*}。その頻度は周囲の隣人よりもずつと多かった。冬場に電気を止められてしまうと、自宅で眠るにはあまりにも寒すぎるので、母と僕はさまざまな男たちの家に「お泊り」をした。その中

のひとり、ネクタイをした大男（この地域の男たちは日曜に教会へ行くとき以外はネクタイなんかしないので、彼のネクタイ姿はとても不自然に見えたものだ）は、後に未成年者への性的いたづらを繰り返して服役したそうだ。

母はよく、午後をずっと寝て過ごしていた。その間、僕は、数少ないアクション・フィギュア人形コレクションを駆使して、G I ジョー遊びをしていた。遊び終わると必ず人形をひとつずつ注意深く整然と几帳面にプラスチック袋に戻した。秩序のない生活の中で、これだけは唯一、思ったようにコントロールできることを楽しむかのように、系統立てて悪者と正義の味方を別々の袋に入れ、武器は武器でまた別の袋にしまう。悪者になったり正義の味方になったりと、しょっちゅう入れ替わっていた人形も何人かいた。

風雨にさらされて劣化した玄関ポーチは、羽目板が3枚抜けて溝になっていた。時おり、その玄関先にごくからともなく食料品入りの袋が出現することがあった。母は、彼女が祈りを捧げたおかげで、聖アントニオが食べ物を届けてくれたのだと僕に説明した。聖アントニオがくれるピーナツバターや白パンや袋菓子のポップタルトやフルーツ・ロールアップを主食にした食生活は、かなり長く続いた。ポーチと言えば、7歳のとき、僕はあのポーチで転んでいる。腐った羽目板が太った子供の体重を支えきれずに壊れ、4フィート「1メートル強」下の歩道に顔から落ちた。血を流して泣いていた僕は、

奇妙なダブル・パンニックに襲われていた——ひとつは、顎から血がたれて服を赤く染めていくのを見てのパンニック、もうひとつは、泣き叫び両腕を振り回しながら家に駆け戻った僕を見てもソファから動くこともできず、ただ途方に暮れている母の姿を見てのパンニックだ。結局、救急室までの2マイル「約3キロ」ばかりの距離を、僕はひとりで歩いた。あのとときの傷跡は今も残っている。

毎日小学校から帰宅したときの家の状態は、母が2シフト制の仕事に就いている期間は、もちろん誰もおらず、そうでない期間は、眠りに落ちた母がソファにいて、灰皿には、まだ火が消えていないタバコがあり、吸われることなくフィルターまで到達した1インチ半の灰が残っていた。もしかして彼女は、S A H M 「専業主婦」を指す言葉で直訳すると「家にいるママ」という言葉の意味をはき違えていたのかもしれない。1年生のときの担任は、僕のことを何度も「鍵っ子」と呼んでいたが、僕にはその意味がよくわからなかった。僕が作る友だちは、おおむね主流逸脱派の子ばかりだったけれど、彼らの主義をそのまま真似たこともなければ、特定のグループに染まったこともなかった。こういう種類の子供のひとりとして僕は中学を卒業し、思春期が訪れ、高校に入る頃には、すべての友だちが近所の非行少年かドラッグ・ディーラーばかり、そのほとんどが同じ年かちよつと歳下の少年ばかりだった。ジェローム、パッチ、ジャットン、ムック、パッチョ、J ナイン、B L R、それからビッグ・ウィル。ほぼ全員が20歳を迎える前に刑務所を経験することになる。当時、ライアンがこのエリアに足を踏み

入れることはほとんどなかった。父親から禁じられていたからだ。

14歳にして、僕は大人並みの責任を負っていた。夜と週末には、未成年の労働規定なんか無視して、老人ばかりを相手に営業している地元のチェーン・レストランで時給4ドルの皿洗いをした。そして16歳の誕生日、僕は母からサブライズ・プレゼントをもらった。酒を断った彼女自身と電動タイプライターだ。このタイプライターは街の向こう側にある質屋で母が格安に手に入れたものだった（禁酒のほうはどういう経緯で手に入れたのか今でもよくわからない）。

最初のうちは、今回の禁酒もまた、これまでに何度もあった短い戦いに違いないと思っていた（数ヶ月連続で断酒したことは過去にもあったから）。きつとまた、僕が帰宅したある夜、家で酒に溺れている母を発見することになるに違いないと思っていた。ところが今回だけは違った。母は溺れることなく泳ぎ続けた。母がどうやって酒のない新たな生活の活力を得ていたのかわからなかった。何年もずっと酒と格闘してきた母の姿を見てきただけに、この現実はなかなか信じられなかった。僕は毎晩、家に帰って鍵穴に鍵を入れるたびに、このドアの向こうには、1インチ半の燃えさしがついたままのタバコを手に、意識半ばでソファに寝そべる母の姿があるのではないかと身を固くする自分が出た。だけど、実際には、僕がいつ帰宅しようかと、母は意識のはっきりした、フレンドリーで、建設的で、節制した、生まれ変わった母のままだった。数ヶ月後、母は地元の法律事務所働きはじめ、国

の定めた最低賃金よりもずっと良い収入を得るようになり、僕らはこの街の向こう側の突き当りにある、ゴキブリの出ない前よりもましなアパートに引越した。白パンとポップタルトが主食だった食生活も手料理に変わった。それでもやつぱり、家のドアを開けるたびに感じるあの不安は一度も消えることがなかった。彼女がまた酒に溺れる生活に戻らないとも限らないと思いつながら家に帰るのは、いろいろな意味で、酔いつぶれて意識を失っている母がいるとわかってはいる家に帰るよりもずっと苦しいものだった。母がいつ逆戻りしてもおかしくないとわかってはいることも、それはそれで地獄だった。だって、僕の知る母はずっとそうだったのだから。それが僕の知る彼女の行動であり、それが普通のことだったのだから。

18歳になったその日、僕は、大きなダブルバッグとあの電動タイプライターと大きな不安をたずさえて、母のもとを去った。

仕事に就いて十分な収入を得ることさえできれば、母が通った道を僕はたどらずにすむはずだ、幸せを手にすることができると信じていた。^{*}僕の20代は、会社で昇進という梯子を上ることだけに費やされた。高校を卒業後、大学進学はパスして、ブロードスパン社の未経験者向け販売業務の仕事を見つけた。このテレコム系の大企業は、1日に10〜12時間、週に6日、時には7日でも「働かせてくれた」。僕は特に優秀だったわけではないけれど、何とかやり繰りすることを学び……次いで、

良い成績をおさめる方法も学んでいった。

初めて受け取った大金の歩合手数料で、僕は大スクリーン・テレビとサラウンド・サウンド・システムと何巻ものDVDを買い込んだ。19歳になった頃の年収は、親のこれまでの年収よりもずっと多い5万ドルに到達していたけれど、僕の消費はそれを上回る6万5000ドルだった。それって、もしかして、お金で幸せは買えないということなのか？ いやいや、そうじゃない、単に家計のインフレ状態を修正すればいいだけの話じゃないか。

そんなわけで僕は、さらに高い収入を得るため、よりハードに働き、20代のほとんどの時間を仕事に捧げたわけだ。22歳で大抜擢となる昇進を果たしたとき、誰の想像も裏切らない方法で僕はそれを祝った。頭金ゼロの住宅ローンで郊外に家を建てたのだ。僕の暮らすこの社会文化のあらゆる事象が、この決断を正しいことだと断言していたし、中には、これはかなり手堅い投資だと言う人までいた（ちょうどアメリカの住宅金融バブルがはじける5年前のことだ）。しかもその家は、よくある普通の家ではなかった。無意味に大きなモンスター級の2階建て家屋で、寝室は3部屋、居間は2部屋、さらにフルサイズの地下室（そこには結局ほとんど使ったことのない卓球台を置いた——もちろんこれもローンで買ったものだ）があった。そうそう、白いピケットフェンスで囲まれた大きな庭まであった。嘘でも夢でもない、本当の話だ。

家を建ててから間もなく、僕は素敵な女性と結婚した。だけど、いわゆる「すごい出世」をするこ
としか考えていなかった当時の僕は、結婚式のことあまり覚えていない。覚えているのは、雨が降
っていたことと、茶色の瞳の花嫁がとても綺麗だったことぐらいだ。それから、式の後にハネムーン
でメキシコに行ったことも覚えている（これもローンで）。でも、それ以外のことはほとんど記憶に
ない。結婚記念日も覚えていない。金の結婚指輪をはめた僕らが日焼けをして帰国すると、僕は仕事
に戻り、車が2台入るガレージに高級車を2台入れ、新築の家の中は素敵な家具や家電で満たし、限
度ギリギリまで借金を重ねた。僕はアメリカン・ドリームに向かって高速車線をブツ飛ばしていた
のだ。同じような消費生活をしていた同世代よりも、おそらく数年先を行っていた。彼らもきつと、
5〜6年も経って20代後半になれば追いついてくるだろう。だけど、僕は先頭を突っ走っていたのだ
——それって抜群にすごいことだ、よね？

昇進を何度か繰り返した（22歳で店長、24歳で地域担当マネージャー、27歳でディレクター）僕は、
最速で出世をとげた名士のような存在になっていた。このままハードに働き続け、すべて順当に運ん
だとすれば、32歳でヴァイス・プレジデントに、35〜40歳でシニア・ヴァイス・プレジデントに、45
〜50歳で（CFOとかCOOとかCEOとかの）C系の重役になり、最後は特恵的退任手当をもらっ
て退職というコースを歩んでいただろう。当時の僕はそうなることを望んでいた！ あと数年ほど、

このみじめな気分を味わい、知り過ぎるほど知っている社内派閥や書類仕事をコツコツこなしさえすればいいだけのことだ。とにかく上昇し続けて、下だけは絶対に見ないようにしていればいいんだ。もちろん、みじめな気分を味わうことを嫌って、昇進を望まず、今の地位のままとどまろうとする者もたくさんいた。だから僕は、5年前、親友のライアンを口説いて一緒にこの梯子を上らないかと誘い、最初の一段目をチラつかせることさえした。昇進はルーキーを爽快な気分させるものだ。高額な給料明細やイケてる役職名に幻惑されて、そこに限りない可能性と選択肢を感じる。それを嫌がる人なんていないからね。ライアンもまた、この梯子に足を掛け、寶石の散りばめられた梯子の棧を一段ずつ上り、全社員の中でトップクラスの販売員になり、後には、トップクラスの販売マネージャーになった。

そんなわけで、僕とライアンは今の会議室にいる。表面上は勝ち組とされるふたりの若者が、蛍光灯にその身を照らされている。僕が師と仰ぐカールという名の勝ち組ビジネスマンが、数年前にこう言っていた、「稼ぎが2万ドルの男に10万ドルの稼ぎ方を尋ねても始まらないだろう」と。この格言は「ここにいる不機嫌な男たちに幸福になる方法を」と置き換えても成立する。僕が熱心に見習っているここにいる不機嫌な男たち、そう、僕が目指しているヴァイス・プレジデントや重役たちに、幸福について尋ねても始まらないのだ。だって、彼らはみじめな気分でのいるのだから。

念のために言っておくけれど、彼らは悪人なんかじゃない。仕事のせいで変わってしまっただけ、肉体的にも精神的にも変わってしまっただけだ。彼らは些細な不便にも怒りを爆発させる。彼らは揃って太り過ぎて不摂生だ。彼らは眉をひそめて不機嫌な顔をし、あたかも全世界が自分を陥れようとしているとでも言わんばかりに、不平ばかりを言い続ける、または、誰の目から見ても嘘とわかる偽りの楽観主義を装っている。彼らのほぼ全員が、2度目か3度目か4度目（！）の結婚生活を営んでいる。そしてほぼ全員が孤独で寂しそうだ。イエスマンやイエスウーマンたちの大海原をたつたひとりで漂流している。彼らの健康状態は言わずもがなだ。

彼らの健康はかなりシリアスな状態にある——肥満、痛風、癌、心臓発作、高血圧、例をあげていたらきりが無い。ここにいる彼らは、ストレスや不安が起因とされている、ありとあらゆる病気とかかわりがある。中にはそれが気高さや勇気の象徴だとも言いたげに、自らの病気を勳章のようにひけらかす者までいる。僕と似たような上昇曲線を描いている若手の同僚のひとり、つい最近、彼にとって初の心臓発作にみまわれたばかりだ。まだ30歳なのに。ただ僕だけは例外……なのか？

果たしてそう言い切れるだろうか？ 僕と彼らのどこが違うというんだ？ 言葉で「僕だけは違う」と言ってみたところで、違う存在になんてなれない。ここにいる全員が「自分だけは違う」とか「自分のやり方は違う」とか「自分が指揮をとれば、まるで違う結果を出せる」とか、自信満々に言っているじゃないか。「あと数週間／数カ月／数年で、私は目標にたどりつける」と彼らは言う。だけど、その目標が何であれ、そこにたどりついたとして、その先に何がある？ 仕事が楽になるわけでもない^{*}。というか、もつと忙しくなるのは目に見えている。より多い労働時間、より多くの要求、より大きな責任のしかかってくる。僕らは義務という名の首輪をして苦悶する犬のようだ。医者のように、いつでも待機して、まるで自分のテクノロジー機器に鎖でつながれているかのように、常にEメールやスマートフォンやメッセンジャーや電話と格闘している。かと言って、医者のように人の命を救っているわけでもない。ちよつと考えればわかることだ、僕らは自分のことさえ救えていないじゃないか。会議テーブルの向こう側で、誰かが欠伸をする。トラヴィスカケントのどちらかだ。それともションかな？ そして今、僕も欠伸をしている。まだ朝の9時前なのに、僕はもう3杯目のコーヒーを飲んでる。気が急いで眠れなかった昨夜の睡眠不足を補てんしようと、ガブリと一気に飲み干す。こんなうんざりな気分には、もう、うんざりだ。僕はほぼ毎晩、仕事にまつわる悪夢をみている。上司に怒鳴られたり、まったく知らない仕事を任せられたりする悪夢。たいていはパニック状態になって

罪悪感をともなう嫌な気分で見ます。

プロジェクトは、あのピンボケ画像を映し続けるため、せつせと音を鳴らしている。ブブブブブ。目の前のテーブルに置いておいた会社支給のブラックベリーのスマートフォンがバイブ音をたてる。ブブブブブ。母からだ。発信者IDに「ママ」という表示。僕は慌てて受信拒否ボタンを押し、画面から放たれる光を消す。母と最後に話したのは、ええと……、いつだったっけ？ 感謝祭だったか？ そんなに長く電話してなかったっけ？

これより数カ月前、母は「隠居」するためフロリダ州セント・ピーターズバーグに引っ越していた。どうやら彼女の言う「隠居」とは「老人向けの小さな政府助成アパートメントで社会保障制度を利用しながら暮らす」という意味のようだ。僕はまだ行ったことがないけれど、フロリダは素敵なおところらしい。少なくとも母がEメールに添付してくる砂浜の景色や、ピントの合っていない夕景や、キャンキャン鳴くヨークシャテリアのセラ（この名前は「セロトニン」に由来する）の数えきれないほどの写真から察するに、とても良さそうな土地のようだ。母はセラにアイスクリームやピーナツバターをあたえ、カラフルなセーターを着せ、小さな頭にはセーターとお揃いのリボンをつけまくって街中を闊歩しているという。セラは母の空虚な世界の中心にいる。送られてくる写真の中には、この犬を抱いた母が、物で溢れるアパートの部屋で、隠居生活で太った体を着飾り、卒業写真のように健康的

な笑みを浮かべて胸をそらせているものもある。その写真の母も犬も、とてもリラックスして幸せそうだ。母はどうやら今でも酒を断つたままらしく、義歯だらけの歯を見せながら本物の笑顔をたたえている。

僕のブラックベリーのスクリーンがふたたび光を放ち、母からボイスメールが届いていることを知らせる。会議は今まさに終わろうとしている。各自がラップトップを閉じ、頭上で蛍光灯がチカチカツと点灯し、ずつと息をひそめていた参加者の群れにホッとした雰囲気の流れる。それぞれが退室し、それぞれの場所へと散つてゆく。最初にバタバタと出て行くのは、決まって愛煙家たちだ。まるで火事から避難するみたいに、部屋の両端にある出口に向かって突進する。僕はキョロキョロと探してみたが、ライアンはすでにいなくなっていた。あいつはいつもそうやって忽然と姿を消す。少し後で、僕はトイレで彼を発見する。便所の個室ドアの下から、400ドルの靴を覆うようにズボンをくるぶしまで下ろした彼の足元が見える。このキャブプトウ・オックスフォードは僕と同じブランドの靴で、準備万端とばかりに、しつかりと磨き上げられている。僕が手を洗っていると、ライアンがトイレを流す音が聞こえる。続いて個室ドアが力いっぱい開かれる音がする。

「新しい彼女とは上手くやってるかい？」と僕は背後のライアンに鏡越しに尋ねる。

「どの彼女のことだ？」彼はとぼける。

「赤毛の娘さ……バーで会った」僕はそう言いながらペーパータオルを引き出す。先週、彼はこの新しい彼女を僕に紹介した。どうやら彼はとても気に入っているようだ。でも僕はすっかり彼女の名前を忘れてる。

「うーん、どこから説明したらいいかな」ライアンはニヤリと笑う。「金曜の夜にデートしたんだ。ダイナーを食べてから飲みに行った。で、彼女の車で彼女の家に行った。ソファで良い感じになってナニがはじまった。自然な成り行きだね。でもふたりともちよつと飲み過ぎていたんだ。そのせいで、ちよつと普通じゃなくなっていた。変態プレイまでは行かないけど。ただ、ちよつとだけ過激になった。服を破いたりね……」

僕は鏡で髪型を整えながら、彼の話に耳を傾けている。

「……で、結局、午前3時ごろまで起きてたかな。だけど彼女は翌朝8時には出勤しなければならぬ。だから僕は、『泊めてはもらうけど、朝は勝手に自分の車まで歩いて戻るから送ってくれなくて大丈夫だ』って言ったんだ。そんなに遠くに停めてたわけじゃないしね。せいぜい1マイル程度さ。だから聞いたことないはずだった。ところが、いざ朝になってみると、下着もベルトも見つからないし、ジーンズはジッパーのところから引き裂かれていたし、しかも、僕の身体のあちこちに彼女のグリーターがくつついてキラキラ光ってるんだ」

「グリッター?」

「車まで歩くのは、もはや罰ゲームだったよ。さしずめ野生のユニコーンに引つかかった男の姿さ」
僕は軽蔑と羨望が入り混じった視線を彼に向ける。ライアンは18歳で結婚したが、離婚してからもう5年も経っている。それは僕の結婚生活と同じ年数だ。彼は楽しみ、面白おかしく暮らし、魅力的な女性とデートをしている。理想の生活を送っている、と僕は頭の中で思う。一方の僕はセックスレスで、一番頻繁なセックス・パートナーは自分の左手という始末だ。

「先週の『CSI…マイアミ』見た?」とライアンが手を洗いながら話題を変える。

「実はまだ……」

「いやあ、ああ来るとは、本当に意外だったよな」と割り込んできたのは、名称のよくわからないナントカ部でディレクターをしているチャド・ラトクリフだ。いつの間にトイレに来たのだろう。実際の話、彼の出現回数のうち半数は一体どうやって現われたのかはつきりしない。彼はまだ30歳だといふのに、高校時代の全盛期と比べて、ベルトの穴1ダース分も太り、身軽さもそれに比例して失われている。なのに他人の会話への出入りだけは、いまだに軽快だ。彼は僕の言葉を待つことなく、ペラペラと話しはじめる。「あのヤンキースの帽子の男が今シリーズ前半のあの殺人事件の犯人だったとはね。マジですごい、最高のエンディングだったよね?! シリーズ最終話にピッタリのエンディング

さ。いやあ、まさか、ああ来るとは想像もつかなかった。きみには予想できたかい?」

「さつき言おうとしたところだけど、まだ最終話は見えていないんだ。今夜見ようと思ってハードディスクに録画してあるからね」と僕はイライラしながら答える。

「ああ、それは、それは。ええと、まあ、それほどたいした最終回でもなかったし」と言いながらチャドは後ずさりしてから回れ右をして、ペーパータオルも取らずに、濡れた手のままトイレを出て行く。

ライアンは僕を見て肩をすくめる。

エレベーターまで続く廊下の壁は、まるで精神病院のそれのようで、鮮やかな蛍光白色で窓もない。この建物自体は何千枚もの窓ガラスで覆われているというのに。僕はイラついている。エレベーターに向かって歩く僕の頭の中は、今晩見るのを楽しみにしていた「CSI…マイアミ」のことでいっぱいだ。それが今日のハイライトになるはずだったのだ。ソファにゆつたりと座り、サラウンド・サウンド・システム付きの大スクリーン高解像度テレビを前にして、あの柔らかい革に身を沈め、膝にラップトップを開き、Eメールに返事を送りながら、デヴィッド・カールソ率いる警察官兼科学者の面々が、僕の母が暮らす土地からほんの数時間南にある「多文化の交わる常夏のマイアミ」で事件を解決する様子を見て楽しむ予定だった。まだ朝の9時半にもなっていないのに、同僚のせいでその夜のひと時もすっかり台無しだ。僕はブリーフケースから頭痛薬のアドビルを取り出し、コーヒ

1で一気に4錠流し込む。

エレベーターのベルが鳴ってドアが開くと、この小さな箱から従業員の一団が吐き出されてくる。この箱に残っているのはひとりだけ——当社のCEO、ロッド・ブラッケンだ。ロッドはどういう人物かというところ、この会社で彼と一緒にエレベーターに乗りたいたいと思っている社員はひとりもない、そういう人物だ。これは本当の話で、ロッドとエレベーターを共にすると、尋問もどきの脅威のひと時が間違いなく繰り広げられるので、それを避けるため、ほとんどの社員が、時にはやりすぎに思えるほど警戒している。僕だって、ただでさえ閉所恐怖症になりそうなこの空間を彼と分かち合うくらいなら、ハイヒールでハーフマラソンを走るほうがずっとましだと思っている。でも今回はタイミングを逸してしまった。僕はエレベーターに乗り込んで16階のボタンを押す。(頑張れば耐え切れるはずだ……ほんの数階分のことじゃないか)。

「ヘーイ！ ジェイソンじゃないか！ きみに会えるとは嬉しいな！」ロッドの偽りの陽気さに僕の思考が停止する。彼が僕の名前をジェイソンだと思いついてる理由はわからない。もしかしたらジェイソン・エッパソンと混同しているのかもしれない。確かに同僚のジェイソンは、僕と似ていないくもない役職についているけれど、背丈は僕より1フィートも低い。背丈に関して言えば、ロッドは「背が高い」と「ものすごく背が高い」の中間ぐらいの長身で、ほぼ僕と同じだ。でも、僕から見る

と彼はそそり立つ塔のように見える。高級品で身を固め、すべてがテーラーメイドで、その姿勢からしてエリートを具現している。僕の暮らす世界とは、あまりにもかけ離れているせいで、彼が八百屋で買い物をしたり、洗濯物をたたんだり、駐車メーターに小銭を入れている姿はどうしても想像できない。ただ、声だけはしわがれた喫煙者のそれで、保守系トークショーの司会者のような喋り方ではない。彼がジョージ・W・ブッシュに投票したことは100パーセント間違いないし、賭け金を2倍にしてもいい。とは言ったけれど、僕が彼の立場だったとしても、やっぱりそうしていただろう。この世界では、そうすることが必須事項とされているから。

「店舗の調子はどうかな、ジェイソン？」と彼が尋ねる。荒れ切った彼の顔に政治家のようなスマイルが浮かぶ。

ロッドの肌は不健康に日焼けしている。彼が大きな手をこちらに伸ばして握手を促す。圧倒的な握力だ。僕が多数の小売店を取り仕切っていることを心得ている彼でも、僕がダイレクターとして、このダウンタウンの社屋で会議に次ぐ会議（マーケティング会議、製品会議、P&L会議、運営会議、マーチャンダイズ会議、顧客離れ分析会議、販売会議、顧客存続率分析会議、人事会議など）に明け暮れているため、皮肉にも管轄店舗で時間を費やすことがほとんどないという事実は知らないらしい。次に開かれる会議の準備をするための会議前会議だつてある。これがジョークだったら、どん

なに良いだろう。

その事実をロッドに説明しようかな、と一瞬迷うが、僕は思いとどまり、漠然性と具体性のバランスを絶妙に保った返事をするにしよう。僕が得意とする、あの完璧なざれごとだ。上首尾に聞こえていることを祈りながら、いくつかのデータ・ポイントを盛り込み、それらしくでつち上げた言葉を並べ立てる。

このエレベーターは本当に動いているのだろうか？ 疑わしくなるほどゆっくりに感じる。まだやつと12階にたどり着こうかというところだ。ロッドは重々しい顔つきで僕のことを見つめる。見え透いたデタラメが見破られているのだろうか？ すると、唐突に、この動く小箱は音をたてて止まり、まるで聖書の1シーンのように、ドアが左右に分かれ、目の前に広がる豪華な木目張りのフロアが現われると、彼がその中に足を踏み出す。神秘的な重役フロアにようやくたどりついて、僕は救われる。重役フロアが僕のフロアよりも下階にあるというのは不思議な話で、まるで、自分の属する煉獄へ向かうために、わざわざ地獄の底を通り抜けなければならないみたいだ。

ロッドは立ち止まってこちらを振り返り、僕の目を真つ直ぐ見つめる。「今月あの地域には相当な売り上げが必要だぞ。きみに期待しているよ、ジェイソン」彼はドアが閉まり切る直前にそう言う。僕の全身が安堵感で満たされる。右手で顔を覆って鼻孔から空気を吸い込み、息を止め、エレベータ

ーが2階上昇したところでゆっくりと息を吐く。ヨガの呼吸法だ。

このフロアの角にある僕の専用オフィスまでの道のり（サウザンドアイランド・ドレッシングと同じ色の仕切り区域の脇を抜け、しゃくに障る自動販売機が設置されている小便色の休憩室の脇を抜け、給水器のところまでふたりの若い女性社員が立ち話をしているというコテコテのシーンの脇を抜ける）は、味気のない退屈な道のりだ。喫煙者の群れが戻ってきて、仕切りのあたりをノロノロと歩いている姿は、人と言うよりは牛のようだ。ここ16階の強い照明の下で、彼らの歯はセピア色に見える。隅の角にある僕の専用オフィスは、その響きほど素敵なものではない。リリパット人用のスペースかと思えるほど小さく、獨創性も面白味もなく、一昔前の映画が描く未来像にも似た、嘘っぽい未来、そう、過去の人々が想像していた近未来のようだ。僕の生活のすべてがこの壁に囲まれた空間の中にある。椅子の背後の窓からは、向かいの高層ビルが見えるけれど、それは今ちょうど僕がいるこのビルとほとんど同じ見た目のビルだ。彼らが見ている景色は、彼らを見ている僕の見える景色であり、その景色もまた、彼らに見られている……まるでエッシヤアの絵を地で行っているようだ。窓の強化ガラスには、音もなく雨が打ちつけ、濃淡を作っている。でも、その雨を降らせている空はここからは見えない。目が眩むような高層ビル群があるだけだ。高層ビルに邪魔されることなく見えるのは、ここから4ブロック南側にあるオハイオ川とその向こう側に広がるケンタッキーの北部だけだ。

僕はガサガサとマウスを動かしてスリープ中のコンピュータを目覚めさせる。僕が生まれたのと同じ年にリリースされた、パーカッションの効いたフィル・コリンズのヒット曲「In the Air Tonight」がコンピュータの小さなスピーカーから流れ、まるで『アメリカン・サイコ』の主人公パトリック・ベイトマンさながらに、「コリンズのソロ楽曲を聴きたい」という僕の欲求を満たしてくれる。無数のEメールを確認しながら、僕はいつの間にか一緒に歌っている。「ウェル、アイ、リメンバァ!」、次のドラマティックなドラムも口真似して、コリンズを最後の一節へと導く「ドウ、ダ、ドウ、ダ、ドウ、ダ、ドウ、ダ、ダー、ダー、ダー」。メールの受信ボックスは240件のメッセージで肥大化している。デーン! これで241件に増えた。まだまだ増え続けそうな勢いだ。書類用のクリップに手を伸ばした拍子に、勢い余って今日4杯目のコーヒーをひっくり返す。熱い液体がキーボードにかかり、デスクをつたって僕の股間にも落ちる。「ファック!」、僕はプリンター用紙の半束で液体の流れをとめる。用紙のページに僕のミステイクがしみ込んでゆく。

僕の生活は、ほぼすべて箱の中で繰り広げられている。毎朝、家という箱を出て車という箱でビルという箱に出社し、エレベーターという箱に乗り込んでオフィスという箱に入り、デスクに置かれた光を放つ箱を見つめ、弁当箱のランチを食べ、箱から箱を渡り歩いてさまざまな会議に出席し（ちなみに会議では「箱におさまったような考え方をするな」と言われ）、車という箱を運転して我が家と

いう箱に帰り、電子レンジという箱で温めたボックス・ダイナーを箱型のリビングルームに置かれたテレビ（通称バカの箱）の前で食べる。僕はそうやって1年の50週間、週5日×6日を過ごしている。この行為はペットボトルのリサイクル並みに無限に繰り返される。

今日の正午、僕はひとりでランチを食べる。それは癒しを切実に求める僕を、少しだけ満たしてくれる唯一のひと時だ。午後には会議に次ぐ会議に次ぐ会議が控えている。「ミーティング・マンデー」と呼ばれている月曜日、僕はコーヒー染みのついたズボンのまま、心臓をバクバク言わせながら、最後まで座り通さなければならない。会議の最中には、誰かが意見を言うたびに相槌をうち、適当な間隔を見計らって心にもない熱弁をふるい、感心させるべき人々が感心してくれることをただただ祈る。5時半にすべての会議が終わると、僕のフロアの社員は、ほぼ全員が1時間も前に退社している。あいつらは落ちこぼれで、僕とは戦っている土俵が違うんだ。僕がやっているような、行きたいところにとだどりつくための自己犠牲を好まない人たちだ。行きたいところがどこなのかはともかく。

「犠牲」。なんて興味深い言葉だろう。この言葉の本当の意味は何だろうか？僕はよく「僕の犠牲はこれで十分だろうか」と自問するけれど、もしかしたら「僕の愛はこれで十分だろうか」とか「僕の優しさはこれで十分だろうか」とか「僕の献身はこれで十分だろうか」とか、もっと気の利いたことを自問すべきなのかもしれない。だけど、答えを聞くのが恐ろしいから、やっぱり、そのことは問

わないようにしよう。

毎朝、僕は夜明け前にオフィスに着く。空は熟れたナスのような夜明け前の色をしている。たいていの場合、僕はこの16階フロアに1番乗りか2番乗りで到着する（つむじまがりの上司の上司が僕より先に来ていることもあるけど、最近はその頻度もグッと減ってきた。彼は現在離婚調停中で、噂によると、かなりややこしいことになっているらしい）。朝早く出社して夜遅く帰宅するというのは、一石二鳥の効率的な方法だ。そもそも、労働時間の多さを上司たちが感心してくれるし、ラッシュアワーの渋滞を避けることもできる。後者の問題は、シンシナティとデイトンのちょうど中間にある準郊外（郊外の郊外）のベッドタウンに暮らす僕にとつて、とても重要だ。渋滞がなかったとしても、会社から家まで車で45分かかる道のりだが、ラッシュアワーともなると、その3倍もかかってしまう。そんなわけで、僕は毎晩7時までオフィスに残るようにしている。そんな時間に僕以外でこのフロアにいるのは、ありとあらゆる植木鉢に水をやり過ぎることと有名で、年齢不詳のナイジェリア人掃除夫のオマールだけだ。

「ゴミ箱を空けましょうか、ミスター・ミルバーン？」オマールは毎晩必ず僕にそう尋ねる。

「ジョシユアって呼んでくれれば」と僕は言う。

「はい、ミスター・ジョシユア」彼はそう言いながら、薄いプラスチックのパッケージがひとつだけ

ポツンと入っていた僕のゴミ箱を空にする。そして、掃除用具が積まれたカートを押して僕のオフィスをしようとする直前に「メリー・クリスマス」と言う。彼は毎晩僕のオフィスにやってきて、僕のゴミ箱を空にしなが、僕と簡単なあいさつを交わす。僕らの間にはちよつとした同胞愛が生まれている。おそらく僕は僕の90%の親戚よりもずっと良好な人間関係をオマールと築いている。

「メリー・クリスマス」と僕も応える。オフィスに座ったまま、終わりのないEメールの数々を読み、勝てないソリティアを何度も繰り返す。冬の太陽はすでに沈みはじめ、血のように赤い夕焼けが向かいのビルの窓に反射する。スマートフォンに目をやった僕は、ボイスメールをまだチェックしていなかったことを思い出す。「8件の新しいメッセージがあります」ロボットのな白人女性の声が流れる。ふたつ目のメッセージは母からのものだ。母の声がスピーカーから流れる。「ハニー、私よ。折り返し電話をもらえないかしら。とても大切な話があるの」、続いて電話を切ることを躊躇する数秒間の静寂がある。

何かがあつたんだ。どうやら母はずっと泣いていたらしい。あの不明瞭なイントネーションは、彼女が赤ワインを飲んだ時のもの、つまり、また酒を飲みはじめたことを意味している。コンピュータのスピーカーからは、リピートモードのフィル・コリンズが囁くように歌い続けている。僕はスピーカーのボリュームを下げて、母の電話番号を打ち込む……しかし、発信ボタンを眺めながら少し躊躇

する。時間が止まる。スマートフォン画面を見つめたまま数秒が過ぎる。母がこれから僕に言おうとしていることが何であれ、僕にはその重大さに耐えられる心の準備ができていない。

2 はぐれ年

1年目…10月

ここ、サンコースト・ホスピスの空気は、あまりにも重く息苦しい。室内の照明はソフトで落ち着いている。僕は母のベッドのすぐ脇の椅子に座っている。母の小さな個室には、少しでもくつろげるようにと、雑貨や細々したもの——写真立てとか、絵とか——が上手に並べられている。ベッドのすぐ横には、母の生命をモニタリングするため設定されたデジタルのLEDスクリーンの複雑な機器が置かれている。でも、そのスイッチはもう入っていない。

頬が涙で熱く焼ける。大人になってから泣くのは初めてだ。ナイトテーブルには浜辺で微笑む母と僕の写真が置かれている。写真の中の母は、微笑みを浮かべ、ブロンドのかつらをかぶっている。